

一対の塔木枯を奏で合ふ

藤田湘子

日本国内でも双塔の揃った寺院は限られている。奈良薬師寺の東塔は天平二年（730）建立。西塔は享祿の兵火（1528）により焼失。昭和五十六年（1981）に再建。その棟梁の西岡常一氏は有名であつたが、湘子先生は、西塔や大講堂再建のため白鳳型和釘を鍛造された白鷹幸伯氏の生き方に傾倒し、平成十二年十一月、「千年生きる和釘」を頂戴し飲み語り合えたと記している。

一塔で鳴る木枯は淋しい。しかし、東西、一対がそろつた塔ならば、見ても穏やかに感じられるかもしれない。人の出会も同じようなもの。偶然出会つた人であつたとしても、一流は一流を知るのである。

塔頂部相輪の水煙では、楽飛天が妙音を奏でている。

2001年（H13作）第十一句集『てんてん』 鑑賞・轍郁摩